

動作法を元にした自閉症児・ADHD 児の運動による療育

Exercise rehabilitation based on Dohsa-hou among children with ADHD/autism.

1 K08B033-6 上島祐衣子

指導教員 主査 岡浩一朗先生 副査 友添秀則先生

【本研究の背景】

私は大学三年から現在まで、東京都 H 市の陸上競技協会が主催する陸上競技教室でコーチをしている。チームには、東京都 H 市内の小中学校に通う児童 88 名が在籍している。チーム内には、自閉症の子どもや、ADHD を有する子どもも数名在籍している。近年、パラリンピックや、スペシャルオリンピックスなど、障がい者を対象にした国際大会やスポーツが注目されている。その一方で、障がい者がスポーツに参加する機会や、情報が充分ではないと同時に、スポーツ少年団においては障がい者の指導を行える指導者は少ない。障がいを持つ子どもはそれぞれに障がいの程度や、成長の速度、できること、できないことが異なり、子どもによって指導方法は大きく変化する。そのため、確立した指導法がないのが現実である。自閉症や ADHD の発達支援や療育の 1 つの手法として、動作法がある。動作法にはトレーナーと子どもと一緒に体を動かす活動が含まれている。動作法で得られる効果と、実際に陸上競技教室に通う自閉症の子どもや ADHD を持つ子どもの変化には同様な特徴がある。そのため、動作法を運動に応用することはできないかと考えた。

運動が自閉症児や ADHD 児の行動改善に役立つという事例や研究が増えれば、障がいを持つ人への運動・スポーツが見直され、障がいを持つ人の運動・スポーツの機会が与えられる。本研究の結果はこれからの障がい児の運動指導を実施する際の有益な資料となる。

【本研究の目的】

本研究ではまず、自閉症児、ADHD 児に対する動作法の効果を明らかにし、次に動作法と運動指導の共通点を挙げ、運動にも動作法と同様の効果があるか否かを考察する。そして動作法を元にした、自閉症児、ADHD 児への運動療育を提言することを目的とする。

【研究方法】

Ⅱ-1 では動作法の根本的な理論と効果を把握するため、

文献資料により動作法の概観をとらえる。Ⅱ-2 では動作法と運動による自閉症児及び ADHD 児の変化を文献資料や、私が指導にあたっているクラブチームの自閉症児の保護者への聞き取り調査によりその効果の共通性をあきらかにする。Ⅱ-3 では自閉症児童の運動によるその他の効果を文献資料により考察し、効果的かつ具体的な自閉症の運動療育を提言する。

【各章の概要】

<Ⅱ-1 動作法の療育効果>

Ⅱ-1 では、動作法の理論を述べ、脳性麻痺児童のための動作法から、知的障害や自閉症、ADHD 児への動作法適用までのながれをあきらかにした。そして、動作法の持つ自閉症児及び ADHD 児の療育効果とその行動変化の過程を明らかにした上で、動作法による自閉症児及び ADHD 児に起きた実際の変化の事例を挙げた。

<Ⅱ-2. 動作法と運動による変化の共通性>

Ⅱ-2 では動作法とクラブの活動内容における共通性をあきらかにした。動作法の基本が運動にも適用することができることをあきらかにした。また、具体的な動作法の訓練プログラムとそれぞれの特性を挙げ、陸上競技教室の練習内容と照らし合わせ、それぞれのプログラムが子どもにどのような影響を及ぼすかを考察した。また、陸上競技教室に参加した自閉症児及び ADHD 児童の変化を客観的にとらえた上で、保護者の 1 人にアンケートを取り、クラブに参加したことにより変化が起きたことを裏付けた。また、動作法で起こった変化と、運動により起こった変化の事例を照らし合わせ、その変化が共通していることを確認し、動作法と運動には、ほぼ同等の効果が期待できることが分かった。

<Ⅱ-3. 療育としての運動>

Ⅱ-3 ではこれまでの研究をふまえ、療育としての運動プログラムと期待される効果を具体的に提言した。さらに、学校とは異なる特殊な環境であるクラブの特徴を挙げ、療育としてのクラブ参加の有効性について述べた。

